

教材発掘・歌人山崎方代

国語科教論 鈴木 芳明

1. はじめに

(1) 吉野秀雄と山崎方代

鎌倉にある瑞泉寺^{ずいせんじ}の境内に入り、鬱蒼^{うっそう}とした樹木に囲まれた参道を歩いて行くと、しばらくして二手に分かれる石段が見えてきます。その石段を、左右どちら側を通ってのぼって行っても、同じ山門にたどりつくことができます。そしてこの山門の手前に、歌人山崎方代（やまざきほうだい）の歌碑と、彼が師と仰いだ歌人吉野秀雄の歌碑とが、対角線上に、お互いを横目で眺めるような格好で建てられてあるのがわかります。

吉野秀雄の歌碑は、半月型の真鶴石^{まなづる}で作られた立派なもので、表面には彼の筆跡による次の歌が刻まれています。

死をいとひ生をもおそれ人間のゆれ定まらぬころ知るのみ 秀雄

一方の山崎方代の歌碑は、吉野秀雄の歌碑の左側手前の草が生い茂っている辺りに、ちょこんと、まるで申し訳なさそうにして建っています。

手の平に豆腐をのせていそいそといつもの角を曲^{まが}りて帰る 方代

吉野秀雄の歌碑は、昭和43年（1968）7月、秀雄の一周忌（^{そうしんき} 艸心忌）の際に、吉野秀雄をしのび、彼を敬愛してやまない人々の手によって建てられたものです。この歌碑に採用された歌は、昭和39年（1964）の「病床晩春詠」三十首の中にある一首から採られました。

人間は誰でも死をいといいます。ましてやその半生を重い病気と闘ってきた吉野秀雄にとっては、生きることは、まさに死の恐怖との闘いであつたとも言えるでしょう。吉野秀雄は、若いときに肺結核を患い、何度も死の淵をさまよう体験をしています。晩年の数年間は、さらに、喘息^{ぜんそく}、糖尿、リュウマチといった重い病気が重なり、ほとんどを病床で過ごしました。まさに秀雄が私淑した正岡子規の晩年と似たような状態になってしまったのです。

しかし、妻子のためにも、簡単に死ぬわけにはいきませんし、貧困生活とも闘っていかなければなりません。生活のためには、病気であっても文筆活動をしていかなければならないのです。人生を生きていくことも、なかなか困難を極めます。さらには、秀雄自身の病気ばかりか、最初の妻はつ子の死を迎えたり、息子のたび重なる手術があつたりと心労も重なりました。二番目の妻登美子と娘の不和も体験しました。人生を生きていくということは、揺れて定まらない己の弱さを痛切に知るばかりです。秀雄の歌からは、晩年の秀雄の、そうした人生をいきっていく上での深刻な苦悩を思い知らされます。

この吉野秀雄の晩年の約10年間、鎌倉の小町にある秀雄の家を、足繁く訪れていた男がいました。それが、山崎方代です。

山崎方代が、吉野秀雄の家に、一週間か二週間のうちに一回は必ず訪れたということが、吉野秀雄の随筆集『やわらかな心』（講談社文庫、昭和53年発行）所収「リューマチと双眼鏡」（初出は、『文藝春秋』昭和40年4月号）の中に、「ある〈変わり者〉の身辺」と題された話の中に出てきます。そこで吉野秀雄は、昭和39年10月号の『短歌』に載った、方代の四首の歌を引用しながら、次のように方代のことを述べています。

うちへは世間から〈変わり者〉と目されている人もいく人かくる。その代表として、山崎方代君を登場させよう。かれは横浜から一週間か二週間に一ぺんずつかよってきて、病臥三年間のわたしにつくしてくれた。

山崎と相知って十年以上になろうか。横浜で歌の会や出版記念会のあったのを機会に、しぜんに出会ったのだが、かれはひどくけわしい顔つきをしていて、はじめはならず者だろうと推察し、用心しながらつきあっていた。

そして年^{とし}恰好^{かつこう}もわからず、えたいもしれず何年かすぎたが、そのうちに、かれには二十も年の違う姉さんがいて、それが横浜で大きな歯科医院を経営し、彼はそこで技工をやっていることがわかった。山崎は歌よみで、歌集も出している（中略）

わたしとは歌への考えがまるっきり違うが、それでも、ニヒルか愛の飢えか何かしらんが、ややおもしろい。うちへきても、歌の話はほとんどしないで、詩の話をする。が、詩の話よりも失恋話が多く、相手の女性はどしどし変わっていく。話がへたくそで、ふるさとの甲州弁かどうかしらぬが、「ナニナニじゃ」という口調が雑できたない。

しかし山崎はわたしを疲れさせるようなことを、けっしてしない。疲れそうになると、さっさと引き上げていく。それよりもわたしが敬服したのは、見知って十年にもなる去年の二月二十日に、みずから身の上をわたしに、はじめてちょっぴり告白したことだ。ジャワ島の東方のチモール島、その近くのマルメロ島（？）とやらでアメリカの艦砲射撃をうけ。兵隊のかれは弾丸のこまかな破片で顔に負傷し、そのために物恐ろしい目つきになってしまったらしい。なぜわたしに十年もいわなかったのか、そこがかれの値打ちというものである。

この文章の後には、吉野秀雄が何度辞退しても、山崎方代は秀雄の家に来る際に、必ず手土産を持参すること。そして、その秀雄の申し入れに対して、方代は、戦傷者年金をもらっているし、姉が金に関して寛大であるから心配無用であること。さらには、姉から時々金をちょろまかしていることや、こんど親戚のバレリーナを連れてきて、寝ている秀雄の顎^{あご}を「なでさせようじゃん。」と、嘘か本当かわからないようなことまで言って、病床の秀雄を笑わせようとしている方代の姿が描かれています。また方代は、秀雄の家に来る前の晩は、「胸がワクワクするんじゃ。」と言って、秀雄を喜ばせるようなことを言ったりもしています。

そして吉野秀雄は、この文章の最後を、「山崎に一向むくいることのできないのが心苦しい。わたしが死んだら、なんでも気に入ったものを持っていつてくれるようにと^{こいねが}冀っている。」という、秀雄の誠実な人柄がうかがわれるような表現で締めくくっています。

この「ある〈変わり者〉の身辺」という文章を読むと、吉野秀雄が方代のことを、当初は「ならず者」として警戒していたのが、方代の、ユーモラスでサービス精神旺盛な人柄に接していくにつれて、次第に秀雄の方代に対する見方が変わってきていることに気づきます。

方代の歌に関しては、「わたしとは歌への考えがまるっきり違うが、それでも、ニヒルか愛の飢

えか何かしらんが、ややおもしろい。」と、方代の歌をあまり評価してはいなかったようです。

吉野秀雄は山崎方代のことを、「病床日録」(筑摩書房『吉野秀雄全集』巻六、巻七所収。昭和45年発行)の日記の中でも書いていますし、『含紅集』^{がんこうしゅう}の中では、「山崎方代君しばしば来訪す」^{ほうだい}「山崎方代へ」という題で歌にも詠んでいます。

一方、山崎方代の方では、吉野秀雄のことについては、方代の唯一の随筆集である『青じその花』(かまくら春秋社、平成3年発行)の中で、次のように述べています。

ある時は怒りに身を震わせ、あるときは身辺に^{ていきゅう}涕泣する。それをこえたところに先生の歌があつて、人間のいのちが切々とした訴えをもち、彫りの深いひびきを伝えている。生涯は清貧であつたし、半生は病床に釘づけでありながら、むしろその生をいとおしんだ。吉野秀雄の歌は修羅^{しゅら}の道であつたけれども徹底して健康であり、人間否定の^{そうしんき}かげは見られない。

(『青じその花』所収『艸心忌』^{そうしんき}によせて 吉野秀雄没後九年)より)

二人の関係は、歌で結ばれた関係というよりは、むしろ、その人柄や歌人としての生き方に共鳴して結ばれた師弟関係であつたようです。

手の平に豆腐をのせていそいそといつもの角を^{まが}曲りて帰る 方代

山崎方代の歌碑は、彼の没後6年目、平成3年(1991)9月7日に建立されました。「手の平に」の歌は、方代の第二歌集『右左口』^{うばぐち}に載っています。

ところで、山崎方代が、吉野秀雄を師と仰いだわりには、この二人の代表的な歌は、その歌の雰囲気、あまりにも異なっていることが一読してわかります。人生を、常に生と死の側面から眺めているような、真剣で張りつめた秀雄の歌に対して、方代の歌は、どこことなくユーモラスで、小市民のささやかな幸せが感じられます。

しかし、よくよく考えてみると、方代の歌の方には少し疑問がわいてきます。そもそも豆腐を容器ではなく、たぶん両手の手のひらの上に直に^{じか}のせて、持ち帰って来る人なんているのでしょうか。どんなに慎重に扱ったとしても、きっと豆腐は、途中でぐちゃぐちゃになったり、道端に落ちてしまったりすることでしょう。そして、実際のところは、手のひらのあたたかさで、ひんやりとした豆腐の美味しさは、そこなわれてしまうのではないのでしょうか。

ということは、この方代の歌は、実際にありそうできて実はありえない設定のもとに詠まれている歌であることがわかってきます。つまり実景を詠んだものではないということです。

おそらくは、大好きな豆腐を買って、ワクワクしながら家路を急ぐ、市井の人間のそういうささやかな期待感なり幸福感なりを描き出すことが、この歌の最大のねらいだったのではないかと思います。どこにでも見られそうな光景ですが、しかしあくまでも短歌という虚構の世界の中で演出された主題を方代は詠んでいるわけなのです。



瑞泉寺境内にある山崎方代の歌碑

実は、そこに方代の歌のしくみがあって、言葉は悪いかもしれませんが、読者は、まんまと作者のその術中にはまってしまっているわけなのです。

しかし、この歌を詠んだ読者は、決してだまされたとは思っていないでしょう。むしろそれどころか、逆にこの歌に、人のぬくもりのような温かさを感じて、心がやさしくなったり、いやされたりしているのではないのでしょうか。そして、そこにこそ方代短歌の真骨頂があるのではないかと私は思っています。

うま　　こうしゅうおうしゆくとうげ
生れは甲州 鷲宿 峠に立っているなんじゃもんじゃの股からですよ
寂しくてひとり笑えば卓袱台ちゃぶだいの上の茶碗ちやわんが笑い出したり
こんなにも赤いものかと昇る日を両手に受けて嗅いでみた
ろうそくの炎をつつむくら闇やみは掴つかんでみたが手ごたえがない

いずれも後で紹介しますが、山崎方代の代表的な歌です。

自分は、「なんじゃもんじゃ」の木きの股から生まれて来た、ただの男ですよ。と冗談で言う人はいても、それをわざわざ短歌の作品にまでしてしまうような人は、おそらくはそれまでの短歌界では、方代以外には存在しなかったのではないのでしょうか。むしろ、こんな歌は短歌ではない、ふざけるのもいいかげんにしろと怒られるのがオチだったのではないかと思います。

孤独で「寂しく」て仕方がないから、試しに「ひとり」で笑ってみたら、「卓袱台ちゃぶだいの上の茶碗ちやわん」も一緒になって「笑い出し」てくれた。なんて詠む歌人がかつていたのでしょうか。

歌の発想やテーマが、既成の概念に縛られずに、あるいは、そこから抜け出していて、とても自由であることにまず驚かされるのではないのでしょうか。

さらにもっとすごい歌があります。朝日があまりにも赤くて感動的だったので、思わず「昇る日」を「両手に受けて」、そのにおいを「嗅かいでみた」というのです。ここまで来ると、発想があまりにも突飛過ぎて、ちょっとついていけませんが、方代にとっては、卓袱台ちゃぶだいの上の茶碗ちやわんであっても「昇る日」であっても、何か身近なお友達のようにさえ感じられてしまうのでしょうか。

「ろうそくの炎」を眺めて、その周りを包み囲んでいる暗闇を、「手」で「掴つかんでみ」ようとしたけれども、「手ごたえがない」からがっかりしてしまった。こういう発想をする人は、どうしようもない孤独と闘っている現代人の中にもいそうではありますが、しかし、なぜか深刻で暗いイメージであるというよりは、おどけた印象さえ感じられて、ホッとしたりしないのでしょうか。

おそらくは、こういったところが方代短歌の特徴であり、人気の出る場所なのではないかと思います。

孤独であることを深刻になって詠む歌人は、かつてたくさん存在しましたが、方代は、あえてそういう風には歌を詠まないようです。方代がまだ山崎一輪いちりんという筆名で、生活の苦勞を詠んでいた頃や、方代という本名を筆名にした初期の頃の歌には、そうした「普通」の歌が見られますが、晩年の歌になればなるほど、逆に意外性をもたせたり、ひとひねりもふたひねりもして、とぼけてみせたりする歌が多く見られます。人によっては、それが方代の「含羞」であるという人もいますし、そういう短歌上の方代を「演じて見せている」のだと言う人もいます。

しかし、いずれにしても、上に引用したような歌を、昭和60年(1985)に71歳で肺ガンで亡くなるまで、真剣に真面目に詠んでいたのが、山崎方代という歌人なのです。

生涯を独身で通し、定職につかず、有力な結社にも属さずに、姉の家や支援者が自分の庭に建ててくれた小屋いそうろうで居候生活を送りながら、独自の境地を切り開いていった山崎方代の歌は、既に

短歌界においては高い評価を受けています。「2. 方代ブーム」で後述しますが、近年出版界においても静かなブームになっています。

ずいせんじ おしょう
瑞泉寺の和尚がくれし小遣いをたしかめおれば雪が降りくる

冒頭で触れた鎌倉の瑞泉寺は、吉野秀雄と山崎方代がともに愛した寺で、毎年7月には吉野秀雄の艸心忌が、9月には山崎方代の方代忌が、しめやかに営まれています。

瑞泉寺の先代住職である大下豊道和尚は、方代をととても可愛がり、方代が来るといつも「お布施」と称してお小遣いを渡していたというのです。

「御布施じゃないの。お賽銭だワ。方代さんが寺に見えられるのは托鉢に思えるんだワ。里見先生は神様みたいなお人だけど、方代さんは仏様のようなだからね。御無礼だとは思いますが、そういうことになるの、誰でもってわけにはいきませんがね。(笑)」という大下豊道和尚の言葉が、『もしもし山崎方代ですが』（かまくら春秋社、平成16年発行）所収「風に吹かれて」という、里見弴、大下豊道、山崎方代の三人が対談した話の中に出てきます。

山崎方代は、汚い身なりで、いつ風呂にはいったかわからないような様子であったといっています。しかし、なぜか放っておくことができない、そんな魅力が方代にはあったようです。

私は、鎌倉の瑞泉寺で開かれている方代忌に、この三年間参加させてもらっていますが、参加者数は、年々増え続けているような感じを受けます。やはり方代人気のせいなのではないでしょうか。

特に、昨平成16年（2004）9月4日に行われた方代忌では、その直後の9月12日の朝に、脳出血で急逝した歌人島田修二が、「方代の方法」という題で講演し、方代は確実に文学史に残る歌人であり、方代の歌の特徴としては「身体的な表現」にあることを、方代の古くからの歌仲間である岡部桂一郎の歌集『一点鐘』（青磁社）の歌と方代の歌とを比較しながら論じていたのが、とても印象的でした。

方代忌は、山崎方代のふる里である右左口村（現山梨県東八代郡中道町）でも、毎年8月下旬に行われています。

山崎方代の生まれた右左口村の宿は、甲府市の南側に位置し、かつては甲州と駿河とを結ぶ中道街道の宿場町でした。

車で中道町に行く場合は、中央高速道路を甲府南インターで降りて、国道358号線を南の富士山の方に向かって走らせると、しばらくしてたどりつくことができます。

中道町では、近年方代に力を入れていて、「方代マップ」を作成して、訪れた研究者や愛好家に対しては、ボランティアで説明する人をそろえたり、22基の歌碑を建立したりしています。町営「右左口の里 中道民芸館」が、昭和63年（1988）に開館し、そこには、方代の遺品、作品、写真などが納められています。

桑の実が熟れてゐる石が笑ってゐる七覚川がつぶやいてゐる
ふるさと乃右左口郷は骨壺の底にゆられてわが帰る村

「桑の実が」の歌は、中道民芸館前に歌碑が建てられています。そして、宿スポーツ広場には、自然石で作られた「ふるさと乃」の歌碑があります。

また中道町では、平成12年（2000）より、教育委員会が方代のホームページを開設していて、

方代の四つの歌集である、『方代』、『右左口』、『こおろぎ』、『迦葉』所収のすべての歌を見ることができます。平成14年(2002)からは、「方代の里なかみち短歌大会」も主催するといった力のいれようです。余談ですが、方代の名をラベルにしたお酒まで出ています。

七覚山円樂寺には、昭和45年(1970)、方代56歳の時に建てた、念願の山崎家一族の墓があります。

(2) 方代ブーム

今年は山崎方代没後20年を迎えるわけですが、山崎方代は、近年静かなブームになりつつあります。方代人気は、生前よりもむしろ没後に徐々に高まって来た感があり、ここ数年に出版された山崎方代に関する本は、ざっと挙げて以下に示すような本が出版されています。

- 『歌・エッセイ・対談 もしもし山崎方代ですが』 山崎方代著 かまくら春秋社 2004年 6月
『迦葉 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 2003年11月
『こんなもんじゃ 山崎方代歌集』 山崎方代著 文芸春秋 2003年 6月
『百年の恋』 道浦母都子著 小学館 2003年 6月
『無用の達人 山崎方代』 田澤拓也著 角川書店 2003年 5月
『山崎方代のうた』 大下一真著 短歌新聞社 2003年 2月
『現代短歌全集 第16巻』 上田三四二 [ほか] 編集委員 筑摩書房 2002年 9月
『現代短歌をよみとく 主題がときあかすうたびとの抒情』 岩田正著 本阿弥書店 2002年 7月
『現代短歌全集 第12巻』 上田三四二 [ほか] 編集委員 筑摩書房 2002年 5月
『方代さん 湯川晃敏写真集』 『方代さん』を創る会 BeeBooks 2001年 5月
『石の心を 山崎方代という歌人』 高村壽一著 邑書林 2000年 8月
『骨壺の底にゆられて一歌人山崎方代の生涯』 江宮隆之著 河出書房新社 2000年 2月
『道化の孤独 歌人山崎方代』 坂出裕子著 不識書院 1998年 8月
『山崎方代全歌集』 山崎方代著 不識書院 1995年 9月
『こおろぎ 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 1992年
『右左口 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 1992年
『青じその花 増補改訂版』 山崎方代著 かまくら春秋社 1991年 9月

これらの状況は、俵万智ほどのインパクトはないかもしれませんが、今や確実にひとつのブームになりつつあると思います。歌もわかりやすく、肩肘張らずに詠めるものが多いことも、人気の出ている一つの原因になっていると思われます。

ところが、これほど世間で注目を浴びている山崎方代ですが、実は、平成16年(2004)度現在の高校の教科書では、ほとんど採り上げられてはいません。私の知る限りにおいては、せいぜい一社『ちくま現代文』で、五首載せられているぐらいではないかと思います。

そこで、今回の文章の主旨ですが、高校生にでもすぐに親しめる山崎方代の歌を、高校の現場においてももっと評価し、紹介してもよいのではないかとということで書きました。

最近出版された、上記の本の中では、方代の文学的な特色に迫ったものとしては、坂出裕子著『道化の孤独 歌人山崎方代』と大下一真著『山崎方代のうた』が優れています。方代の人生を伝記的に詳しく知るためには、江宮隆之著『骨壺の底にゆられて一歌人山崎方代の生涯』、高村壽

一著『石の心を 山崎方代という歌人』、田澤拓也著『無用の達人 山崎方代』等があり、いずれも力作です。

山崎方代のすべての歌を知るためには、1995年に発行された『山崎方代全歌集』（不識書院）が便利です。岡部桂一郎、大下一真、下村光男、紅野敏郎、玉城徹らの編集による労作で、方代が若いときに、地元の新聞や文芸誌に投稿した歌に至るまで可能な限り拾いおこし、「全・歌集」ではなく、「全歌・集」の形式になっています。

研究書としては、方代没後に形成された「方代を語り継ぐ会」が発行している、『方代研究』があります。一冊500円と廉価で、毎年2回ずつ刊行されています。平成17年（2005）3月現在で、第36号まで出版されています。

2. 山崎方代の歌（抄）

それでは最近になって、どうして山崎方代の歌が、これほどまでに人々から受け入れられるようになってきたのでしょうか。実際に、まずその方代の歌を見ていきたいと思います。

下記に選んだ歌は、誠に勝手ながら、私が方代の歌の中から、高校の授業で扱う教材としてふさわしいと思われる歌を選んだものです。そしてこれらの歌は、方代という歌人を評価する上で、文学史的に見て重要であるというよりは、高校の授業の中で、短歌をわかりやすく高校生に理解させるために、そのきっかけとして扱う教材として適切ではないか、という観点から選んだものです。出典は、『山崎方代全歌集』（不識書院、1995年発行）です。ルビは授業で扱うことを考慮して、小学校で学習する漢字1006字以外は、できるだけつけました。

【第一歌集『方代』より】

ポケットの底にかわけるもみ粒を母よ母よと噛みしめるなり	70
茶碗の底に梅干の種二つ並びおるああこれが愛と云うものだ	128
土の上に黒い小さいかげを持ちおれはおのれの歩みをつづける	139
庭土をわずかにそめてひっそりと雪がやんでおる死ぬるは易し	141
かぎりなき雨の中なる一本の雨すら土を輝きて打つ	158
すてられし下駄にも雪がつもりおるここに統一があるではないか	166
一枚の手鏡の中におれの孤独が落ちていた	170
柚子の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ	193

（注．歌の右側に示した番号は歌の番号です）

【第二歌集『右左口』より】

息絶えし胸の上にて水筒の水がごぼりと音あげにけり
それはそれは山の獣も知らざりし寒き夜ふけを母は死にたり
おのずからもれ出る嘘のかなしみがすべてでもあるお許しあれよ
生れは甲州鶯宿峠に立っているなんじゃもんじゃの股からですよ
担ぎだこ取れし今でももの見れば一度はかついでみたくなるのよ
手のひらに豆腐をのせていそいそといつもの角を曲りて帰る
瑞泉寺の和尚がくれし小遣いをたしかめおれば雪が降りくる
死ぬほどの幸せもなくひっそりと障子の穴をつくろっている

こんなところに釘^{くぎ}が一本打たれいていじればほとりと落ちてしもうた
ちちははの墓^ほのうしろに方代^{ほうだい}の名前も彫りて朱を入れている
ようやくに鍵穴^{かぎあな}に鍵をさし入れるこの暗がりのうらがなしさよ
こんなにも湯呑茶碗^{ゆのみぢやわん}はあたたかくしどろもどろに吾^{われ}はおるなり
赤き色のマッチ^{じく}の軸の火が赤し恋はほのかに遂げしめ給え^{たま}
大正三年霜月^{しもつき}の霜の降るあした生まれて父^{ちち}の死を早めたり
こころあたりは相州^{そうしゅう}鎌倉郡^{あざてびろう}字手広^{そうあん}艸庵^{ふだ}の札下^{こも}げて籠りたり
盲^{めし}いてゆく瞼^{まぶた}をとじて遠きひと姉の名を呼ぶ弟なれば

【第三歌集『こおろぎ』より】

手のひらをかるく握^{にぎ}ってこつこつと石の心をたしかめにけり
ある朝の出来事でしたこおろぎがわが欠け茶碗^{ぢやわん}とびこえゆけり
寂しくてひとり笑えば卓袱台^{ちゃぶだい}の上^{ちやわん}の茶碗が笑い出したり
こんなにも赤いものかと昇る日を両手に受けて嗅いでみた
あかあかとほほけて並ぶきつね花死んでしまえばそれっきりだよ
卓袱台^{ちゃぶだい}の上^{どびん}の土瓶^{どびん}に心中をうちあけてより楽になりたり
くろがねの錆びたる舌^{した}が垂^たれている鬼^{おに}はいつでも一人である
生きていたか生きておったか白足袋^{しろたび}の寺^{おしょう}の和尚が来てたもうたり
まっ黒く澄みたる馬の目の中に釜無川^{かまなしがわ}が流れている
連^{つれ}なれる五本の指の一本は仲間はずれのようなのである
ろうそくの炎をつつむくら闇は掴んでみたが手ごたえがない
笛吹^{ふえふき}の石の川原を越えてゆくひとすじの川吾^わが涙なり
ふるさとの右左口郷^{うばぐちむら}は骨壺^{こつぽ}の底にゆられてわがかえる村
真白い手編^{てあみ}のセーターの衿^{えり}の裏にあなたの名前がぬいこんである
親子心中の小さな記事を切りぬいて今日の日記を埋めておきたり
間引きそこねてうまれ来しかば人も呼ぶ死んでも生きても方代^{ほうだい}である
留守^{るす}という札を返すと留守であるそしていつでも留守の方代^{ほうだい}さんなり
ふりむくと己^{おの}れの影がついて来る月かげなれど味方^{みかた}でもある
声をあげて泣いてみたいね夕顔の白い白い花が咲いてる
かくのごと生きていることを恥じながらもげしボタンをくくり付けたり
片付けておかねばならぬそれもまたみんな忘れて呑^のんでしもうた
一度だけ本当の恋がありまして南天^{なんてん}の実が知っております
私が死んでしまえばわたくしの心の父はどうなるのだろう

【第四歌集『迦葉』より】

不二^{ふじ}が笑っている石が笑っている笛吹川^{ふえふきがわ}がつぶやいている
しののめの下界に降りてゆくりなく石の笑いを耳にはさみぬ
一粒の卵のような一日をわがふところに温めている
青葉^{わかみ}しげれる若宮大路^{わかみやおおじ}にてゆくりなくめぐり逢^あいたりあなたなりけり
一日でも浮世^{うきよ}にながくとどまりて父母を偲^{しの}んで泣いてやりたい
馬の背^{はなよめ}の花嫁さんは十六歳^{ほうだい}方代^{ほうだい}さんのお母さんなり

うつし世の闇にむかっておおけなく山崎方代と呼んでみにけり
めずらしく晴れたる冬の朝なり手広の富士においとま申す

3. 選んだ歌の分類

いずれの歌も、高校生にとって、できるだけわかりやすいものを選んだつもりです。高校の授業の中で、山崎方代を教材として扱うことを想定して、プリント等で紹介するならば、こういった歌がふさわしいかということを考慮して選びました。そしてまたこれらの歌は、次のようにまとめて指導することも可能ではないかと思います。

(1) 肉親への愛情を歌ったもの

ポケットの底にかかわけるもみ粒を母よ母よと囁みしめるなり
それはそれは山の獣も知らざりし寒き夜ふけを母は死にたり
ちちははの墓のうしろに方代の名前も彫りて朱を入れている
盲いてゆく臉をとじて遠きひと姉の名を呼ぶ弟なれば
私が死んでしまえばわたくしの心の父はどうなるのだろう
一日でも浮世にながくとどまりて父母を偲んで泣いてやりたい
馬の背の花嫁さんは十六歳方代さんのお母さんなり

(2) 望郷の思いを歌ったもの

生れは甲州鶯宿峠に立っているなんじゃもんじゃの股からですよ
まっ黒く澄みたる馬の目の中に釜無川が流れている
笛吹の石の川原を越えてゆくひとすじの川吾が涙なり
ふるさとの右左口郷は骨壺の底にゆられてわがかえる村
不二が笑っている石が笑っている笛吹川がつぶやいている

(3) 恋愛の感情を歌ったもの

茶碗の底に梅干の種二つ並びおるああこれが愛と云うものだ
赤き色のマッチの軸の火が赤し恋はほのかに遂げしめ給え
真白い手編のセーターの衿の裏にあなたの名前がぬいこんである
一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております
青葉しげれる若宮大路にてゆくりなくめぐり逢いたりあなたなりけり

(4) 人生の孤独感を歌ったもの

土の上に黒い小さいかげを持ちおれはおのれの歩みをつづける
庭土をわずかにそめてひっそりと雪がやんでおる死ぬるは易し
一枚の手鏡の中におれの孤独が落ちていた
死ぬほどの幸せもなくひっそりと障子の穴をつくろっている
ようやくに鍵穴に鍵をさし入れるこの暗がりのうらがなしさよ
寂しくてひとり笑えば卓袱台の上の茶碗が笑い出したり
あかあかとほほけて並ぶきつね花死んでしまえばそれっきりだよ
卓袱台の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり
くろがねの錆びたる舌が垂れている鬼はいつでも一人である
ろうそくの炎をつつむくら闇は掴んでみたが手ごたえがない

ふりむくと己^{おの}れの影がついて来る月かげなれど味方^{みかた}でもある
声をあげて泣いてみたいね夕顔の白い白い花が咲いてる
かくのごと生きていることを恥じながらもげしボタンをくくり付けた

(5)身近な素材を通して、人生観を歌ったもの

かぎりなき雨の中なる一本の雨すら土を輝きて打つ
すてられし下駄^{げた}にも雪がつもりおるここに統一があるではないか
柚子^{ゆず}の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ
手のひらをかるく握^{にぎ}ってこつこつと石の心をたしかめにけり
こんなところに釘^{くぎ}が一本打たれていじればほとりと落ちてしもうた
ある朝の出来事でしたこおろぎがわが欠け茶碗^{ちやわん}とびこえゆけり
親子心中の小さな記事を切りぬいて今日の日記を埋めておきたり
しののめの下界に降りてゆくりなく石の笑いを耳にはさみぬ

(6)身体的な表現を通して、人生観を歌ったもの

手のひらに豆腐^{とうふ}をのせていそいそといつもの角^{かど}を曲^{まが}りて帰る
こんなにも湯呑茶碗^{ゆのみちやわん}はあたたかくしどろもどろに吾^{われ}はおるなり
こんなにも赤いものかと昇^ある日を両手に受けて嗅^かいでみた
連^{つれ}なれる五本の指の一本は仲間^{ななかま}はずれのようなのである
一粒の卵のような一日をわがふところに温めている

(7)人間関係を歌ったもの

おのずからもれ出る嘘^{うそ}のかなしみがすべてでもあるお許しあれよ
瑞泉寺^{ずいせんじ}の和尚^{おしょう}がくれし小遣^{こづか}いをたしかめおれば雪が降りくる
生きていたか生きておったか白足袋^{しろたび}の寺の和尚^{おしょう}が来てたもうたり

(8)方代自身が演出されて歌われているもの

大正三年霜月^{しもつき}の霜の降るあした生まれて父の死を早めたり
ここらあたりは相州^{そうしゅう}鎌倉郡^{あぎてびろそうあん}手広^{ふだ}艸庵^{こも}の札下^はげて籠^{こも}りたり
間引き^{まびき}そこねてうまれ来しかば人も呼ぶ死んでも生きても方代^{ほうだい}である
留守^{るす}という札を返すと留守であるそしていつでも留守^{ほうだい}の方代^{ほうだい}さんなり
片付けておかねばならぬそれもまたみんな忘れて吞んでしもうた
うつし世^{やみ}の闇にむかっておおけなく山崎^{やまざき}方代^{ほうだい}と呼んでみにけり
めずらしく晴れたる冬の朝なり手広^{あした}の富士^{てびろ}においとま申す

(9)反戦の思いを歌ったもの

息絶^{いきた}えし胸^{むね}の上にて水筒^{すいとう}の水がごぼりと音あげにけり

(10)農業への思いを歌ったもの

担^{かつ}ぎだこ取れし今でももの見れば一度はかついでみたくなるのよ

一応以上のようにまとめてみましたが、こうして方代の歌を分類してしまうと、方代の歌を逆につまらなくしてしまう危険性があります。実際には、上記のように単純に線引きできるものではなく、一つの歌の中に、複数の項目に該当するケースが多々見られるからです。

ただ、高校生に対して、方代という歌人がどのような歌を詠み、そして方代の歌には、どのような特色があるかということ、を、わかりやすく理解させるためには、必要な作業ではないかと思ひ、参考のために例示しました。

「肉親への愛情」、「望郷の思い」、「恋愛の感情」、「人生の孤独感」といったテーマは、普遍的なテーマであり、高校生にとっても受け入れやすいものだと思います。

ちやわん うめぼし
茶碗の底に梅干の種二つ並びおるああこれが愛と云うものだ

第一歌集『方代』128 番のこの歌は、その後第二歌集『右左口』では、「女は遠方にいる」と題された一連の歌の中で、

ちやわん うめぼし
茶碗の底に梅干の種二つ並びおるああこれが愛なのだ

という風に改められていますが、ここでは、第一歌集『方代』の歌の方を採用しました。

「ああこれが愛と云うものだ」という表現は、どちらかといえば傍観者的で第三者的な視点で詠まれているような印象を受けるのに対して、「ああこれが愛なのだ」という表現の方は、「女は遠方にいる」というタイトルからしても、個人の主観的な気持ちを、実感的に詠んでいるような印象を受けます。このように、両者の表現には微妙な差異が認められます。

方代が、わざわざ表現を言い換えているわけですから、本来ならば、言い換えられた「ああこれが愛なのだ」の歌の方を採用すべきであるのかもしれませんが、この歌が作られた以下の経緯を知ると、「ああこれが愛と云うものだ」という第一歌集『方代』の歌の方を採用したくなっています。

方代の終の棲家となった鎌倉手広にある方代艸庵は、昭和47年（1972）に、鎌倉八幡宮近くで中華料理店を営む根岸兎雄氏ご夫妻が、自宅の庭に、方代のために四畳半のプレハブの家を建てて提供してくれたものです。高村壽一著『石のこころを 山崎方代という歌人』（呂書林 2000年8月発行）によると、これは当時若宮大路の食堂「さくらや」で働いていた根岸氏が、独立して家を持てるようになったら、敷地内に住めるようにすると、方代に約束していたのを実現させたものだそうです。

当時根岸氏は34歳の若さで、方代は58歳でした。新婚間もない家に、同じ敷地内とはいえ、縁もゆかりもない初老の男を住まわせるわけですから、根岸氏のその度量の大きさには改めて驚かされてしまいます。

そうしゅう あざてびろそうあん ふだ こも
ここらあたりは相州 鎌倉郡字手広艸庵の札下げて籠りたり

もちろん方代は、喜んでやって来ます。それまでの横浜市戸塚区（現栄区）田谷での生活は、農機具置き場を小屋にして住んでいたわけですから、電灯もない生活で、水も近くの小学校まで取りに行かなければありませんでした。不審者の侵入に厳しい今の時代ならば、とても許されそうにない生活を、方代はしていたのです。

「さくらや」は、前述した、鎌倉に住む吉野秀雄や大佛次郎が一杯やりに来ていた店で、時々方代も伴われて来ることがあったそうです。その頃の方代は、前述したように、農家に小屋を借りて、野良仕事に従事しながら歌を詠むというような生活をしていましたので、もちろんお金はあまり持っていませんでした。当然ながら、店ではほとんど飲むことができませんでした。店の隅で、じっと吉野秀雄と大佛次郎の話を聞いていた方代を見かねて、根岸氏が店にないしょで、時々方代に酒を振る舞っていたそうです。

そして、視力が低下してきた方代が、仕事を続けるのがむずかしくて困窮していることを、同郷の吉野秀雄から聞いた根岸氏が、方代に前述のような約束をしたのでした。

そういう根岸氏が、結婚して独立する時に、酒を飲んで上機嫌であった方代が紙を求めて書い

た歌が、「茶碗^{ちやわん}の底に」の歌だそうです。

茶碗の底という、狭いスペースの中に、梅干しの種が二つ仲良く寄り添うように並んでいる、その梅干しの姿に愛情を実感したという意味で、わかりやすい歌であると思います。おそらくは、思春期の生徒に最も人気の高い作品であると思われます。

梅干しの種が、根岸氏ご夫妻を連想して詠まれたものであるということは、特に生徒に知らせる必要はないと思います。歌の中から、梅干しに見立てられた二人の、ささやかな幸せな思いを読み取ることができれば、それで充分なのではないでしょうか。

むしろ、そういうささやかな幸せ感を演出をするために、「茶碗」とか「梅干しの種」いった、日常のごくありふれた素材が使われているところに着目させたいと思います。そして、この歌は、実景を詠んだりリズムの歌ではなく、あくまでも作者のあるイメージに基づいて詠まれた歌であることも合わせて指導したいものです。

この歌は、(3)「恋愛の感情を歌ったもの」の中に分類しましたが、その意味では、(5)「身近な素材を通して、人生観を歌ったもの」の中に入れてもいいわけです。

赤き色のマッ^{じく}チの軸の火が赤し恋はほのかに^{たま}遂げしめ給え
真白^{あみ}い手編のセーターの衿^{えり}の裏にあなたの名前がぬいこんである
一度だけ本当の恋がありまして^{なんてん}南天の実が知っております

「赤き色のマッ^{じく}チの軸」、「真白^{あみ}い手編のセーター」、「南天^{なんてん}の実」といった小道具が、「ほのかに遂げしめ」る「恋」や、愛する「あなた」や、「一度だけ」の「本当の恋」を演出するものとして、いかに効果的に使われているかということを理解させることができれば、まず授業は成功であると言ってもよいのではないのでしょうか。

そして、そういう日常のごくありふれた素材にスポットライトを当てて注目し、一首の歌として立派に仕上げていくところに、山崎方代の歌の特色があり、そして方代のオリジナル性とアイデンティティーがあったのではないかと思います。

そして、その傾向は、(5)「身近な素材を通して、人生観を歌ったもの」はもちろんのこと、(4)「人生の孤独感を歌ったもの」や(6)「身体的な表現を通して、人生観を歌ったもの」の歌の中にも見ることができます。

土の上に黒い小さいかげを持ちおれはおれの歩みをつづける
一枚^{てがみ}の手鏡の中におれの孤独が落ちていた
死ぬほどの幸せもなくひっそりと障子^{しょうじ}の穴をつくろっている
寂しくてひとり笑えば卓袱台^{ちゃぶだい}の上の茶碗が笑い出したり
卓袱台^{ちゃぶだい}の上の土瓶^{どびん}に心中をうちあけてより楽になりたり
ろうそくの炎をつつむくら闇^{やみ}は掴^{つか}んでみたが手ごたえがない
ふりむくと己^{おの}れの影がついて来る月かげなれど味方でもある

以上の歌は、(4)「人生の孤独感を歌ったもの」の中に分類した歌ですが、「土」、「かげ」、「手鏡」、「障子の穴」、「卓袱台」、「茶碗」、「土瓶」、「くら闇」、「ろうそくの炎」といった、方代の生活の中にある、身近な素材がやはり使われています。そして、それらの素材は、(3)「恋愛の感情を歌ったもの」の時と同じように、孤独な「おれの歩み」や、「死ぬほどの幸せもなく」で、「寂しくて」どうしようもない「おれの孤独」を演出するために、効果的に使われていることに気がつきます。

つまり、歌の素材が身近なものであればあるほど、世間や社会と対比された個＝「孤独」が印

象づけられるわけなのです。そして、それが幸福感や恋愛の感情をテーマとした歌の中に使われるのであれば、「ささやかな幸福感」や「ささやかな恋愛の感情」といった、方代好みのテーマを演出する役割を担うことになるわけです。

そして、その小道具は、時には方代自身であったりもします。(8)「方代自身が演出されて歌われているもの」に分類した歌がそうです。

こころあたりは相州鎌倉郡字手広艸庵の札下げて籠りたり
間引きそこねてうまれ来しかば人も呼ぶ死んでも生きても方代である
留守という札を返すと留守であるそしていつでも留守の方代さんなり
片付けておかねばならぬそれもまたみんな忘れて吞んでしもうた
うつし世の闇にむかっておおけなく山崎方代と呼んでみにけり
めずらしく晴れたる冬の朝なり手広の富士においとま申す

こういう方代自身が演出されていることを、坂出裕子は「道化の孤独」と呼び、田澤拓也は「無用の達人」と呼びました。

第一歌集のタイトルに自らの名前をつけた辺りから、方代は、明らかに以前詠んでいた歌風から脱却しようとしていたことが、その歌の変遷からうかがい知ることができます。

詳しくは、「6. 山崎方代の故郷と習作時代の歌」のところで説明しますが、山崎方代がまだ山崎一輪とか宿一輪という筆名で、地元の新聞や、山下陸奥の主宰する『一路』に投稿していた頃の歌は、眼を患った両親をけなげに介護する方代の姿が主に描かれていて、そういう生活苦が、当時の方代の歌の代表的なテーマであったようです。

貧しければ眼科博士にも見せずして遂につぶせしちちの眼ははの眼
どこまでも運命の手の冷たさよちちにつづきて盲となりし母
父と母しかといだきて永久に土をたがやす吾が運命なり
常の如くめしひの父母を隣家の人にとのみて野良にいできつ
ものを視るまなことられしちちとははひたすらに護り七年すぎぬ

『一路』から離脱して『工人』に移った辺りから、方代の歌は、明らかに歌のテーマも文体もそして歌い方も、がらりと変わっていきます。第一歌集『方代』は、その約半分が『工人』に載せられた歌を収録していますが、上に挙げた両親を思う歌と比較してみると、前述してきた第一歌集『方代』以降の歌とでは、意図的にまったく違う歌を作ろうとしている方代の苦心のほどがうかがわれます。

新しい歌を創始するために、それこそさまざまな方法が模索されて実行されてきたのが、第一歌集『方代』から第四歌集『迦葉』に至る、いわゆる“方代短歌”なのではないかと、私は思っています。

そうした試みの一つの方法として、分類した項目の中の、(5)「身近な素材を通して、人生観を歌ったもの」や、(6)「身体的な表現を通して、人生観を歌ったもの」や、(8)「方代自身を演出して歌っているもの」といった歌に見られるような、今までの短歌ではあまり顧みられなかった、新しい素材やテーマが注目されて、そしてそれを効果的に演出するために、方代短歌特有の新たな歌い方が編み出されて行ったのではないのでしょうか。

4. 今回選ばなかった歌について

しかし逆に、下記の事項に該当する歌は、方代研究の立場からすれば、避けて通れない重要な歌ですが、今回は、あくまでも高校の授業の中で、短歌の初心者に対して示したい歌ということで、採用を見送りました。

(1) 第一歌集『方代』成立に関する歌

第一歌集『方代』は、昭和30年（1955）10月、方代41歳の時に、自費出版されたものです。自分の名前を、歌集のタイトルにしたことから、この歌集に込められた方代の思いには、相当なものがあつたであろうということは、想像に難くありません。歌集『方代』の冒頭1番の歌は、次の歌から始まります。

わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒きのれんを分けて出でゆく

この歌の初出は、『工人』第二号（昭和23年11月号）です。「木枯」と題された八首の歌の中の7番目に載せられた歌で、初出の際には、「出でゆく」という文語ではなくて、「出てゆく」という口語表記が使われていました。さらに、この歌は、第二歌集『^{うばぐち}右左口』にも載せられていて、そこでは「のれん」は、「暖簾」と漢字表記に改められています。

歌集の冒頭の歌を選ぶに当たっては、当然ながら、歌集全体の方向性を示す、方代の意気込みが感じられるような、そういう歌が選ばれていると思われます。また、山崎方代という歌人が、かつてどのような歌を目指していたのかということを知る上でも重要な歌であり、方代研究にとっては欠かすことのできない歌であると思います。第一歌集『方代』の巻頭を飾るこの歌の問題を考えることは、方代という不思議な歌人を考えるためにも有効であると思いますが、やはり、高校の現場では、そこまで生徒に要求することはむずかしいのではないかという理由で省きました。

第一歌集『方代』成立に関する歌とは、どのような歌のことか、もう少し説明したいと思います。

第一歌集『方代』に収められた歌は、全部で200首あり、そのすべての歌には、算用数字で番号が打たれています。笠原伸夫「方代における〈山崎方代〉の発見」（『短歌現代』2003年5月号、短歌新聞社）によると、その200首のうち100首までの歌は、『工人』に発表された歌で、101番の歌「ここにわれ見て立つために青桐の葉が青きままに地に散る」が、『黄』創刊号に発表された10首のうちの一首で、199番の歌「名も知らぬ土橋の下にただよい来てしずみ果てゆくこと許されよ」も、同第三号に発表された歌だそうです。

『工人』は、山下^{むつ}陸奥が主宰する『一路』の宗匠主義の打破を目指して、昭和23年（1948）、『一路』から分離独立して来た、山形義雄、岡部桂一郎、竹花忍、長倉智恵雄、芝山永治、山崎方代らによって創刊されたものです。方代34歳の時のことでした。

方代もその『工人』の創刊号には、「木釘」と題した次の四首を発表しています。出典は、『山崎方代全歌集』（不識書院、1995年発行）です。

ゆくところ迄ゆく覚悟あり夜おそくけものの皮にしめりをくるる
寂しすぎる記憶のつづき今日も又くされし靴に木釘を打ち込む

今日は今日の悔を残して眠るべし眠れば明日があり闘いがある
死なずして帰り来し部屋にけだもの黒猫の眼がきらりと光る

上の四首のうち、一首目の「ゆくところ迄ゆく覚悟あり」の歌と、三首目の「今日は今日の悔を残して眠るべし」の歌は、第一歌集『方代』の冒頭近くに載せられました。「ゆくところ迄ゆく覚悟あり」の歌は11番目に、「今日は今日の悔を残して眠るべし」の歌は2番目に載せられました。また二首目の「寂しすぎる記憶のつづき」の歌は、第二歌集『右左口』に採用されました。

「けものの皮にしめりをくるる」や「今日も又くされし靴に木釘を打ち込む」というのは、戦後復員したばかりの方代が、靴の修理をして糊口を^{うばぐち}凌いでいた当時の生活体験が下敷きになっています。

特に、『工人』の創刊号に発表された四首のうちの一首目「ゆくところ迄ゆく覚悟あり」の歌に關しては、前述した笠原伸夫は、同じ文章の中で次のように述べています。

師風随順、敬慕の念を断ち切った感情とも読める。強力な組織から離れ、もしかすると数名の知友との小さな輪のなかでの不遇が待ち受けているかもしれぬ。行く処まで行かねばならぬのだ。ここにはそのような個人的感情と同時に、〈戦後〉という時代世相が如実に示されている。山崎方代はここから出発した。まさしく〈山崎方代〉の成立である。

(笠原伸夫「方代における〈山崎方代〉の発見」より)

『工人』の創刊号に発表された、これら四首の歌の中には、私が「2. 山崎方代の歌 (抄)」で選んだ歌にみられるような、少しとぼけたような方代の姿は見ることができません。何とかして新しい歌境を切り開こうともがいている、方代の真剣な意気込みと覚悟のほどが感じられるのではないのでしょうか。そこには大衆受けをねらった軟弱な姿は、みじんも見ることができません。笠原伸夫が述べたように、山崎方代の歌は、まさしくここから出発したのであって、方代短歌の原点も、ここにあると見るべきだと私も思います。

しかし、かつての方代が、「師風随順、敬慕の念」を持った歌を詠んでいたことも事実であるようです。方代がまだ、山崎一輪という筆名で歌を詠んでいた時代に、方代が上京して、師匠の山下陸奥宅を訪問した際に、師と出会う感激した思いを詠んだ、「上京」と題する八首の歌があります。次は、その八首の歌のうちの最初の三首です。

道べより山下先生の名札をたしかめて着物のえりをかき合せけり (山下先生訪問)
先生とい向ふ窓のガラスすきて庭の枯芝にきえのこる雪
いつくしみ深しゆ師のみ言葉に双の臉のあつくなりつつ

これらの歌は、『一路』昭和12年四月号に掲載されたものです。また、同年十月号の同誌には、山中湖畔で行われた一路懇親大会に参加した際に詠まれた、有名な「山中湖畔の歌会にゆくと言へば四つに折りし五円紙幣を母くれ給ふ」の歌とともに、「先生がおそばにいまし若きわれにむちうち給ふごとし書架の霊長」という歌もあります。さらに同年十二月号には、「大富士にうく雲もなし蘇峰先生陸奥先生が歌語る日」という歌まであります。

いずれの歌も、戦前の、方代がまだ23歳の頃の作品です。それから約十年、間に戦争で右目を失明したり、父龍吉の死があったりという大きな出来事があったことは確かですが、その間に、これほどまで慕っていた師山下陸奥の主宰する『一路』を飛び出さなければならぬ何があった

のでしょうか。

笠原伸夫は、その理由を「〈戦後〉という時代世相」という抽象的な表現でまとめていますが、大下一真著『山崎方代のうた』（短歌新聞社 2003年）には、「わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒きのれんを分けて出でゆく」の歌を解説した頁で、次のように解説しています。

あれほど山下陸奥を慕っていた方代だが、昭和23年七月号をもって、『一路』から離れることになった。竹花忍、岡部桂一郎など、『一路』の親しい仲間が脱会して同人誌『工人』を始め、方代も歩を合わせたからである。「芸術家にならず工人の技術が芸術をほり出すドリルとなろう」と呼びかけるこの同人誌は、戦後に沸き上がった短歌否定論に対する意識と意気を示したものとえようか。宗匠主義の打破、新しい方法の追求を目指す仲間と行をともにしたことで、方代の作品はおのずから変貌を遂げていく

山下陸奥の歌や人柄に対する不満というよりも、敗戦を体験して、戦前的なものや既成概念が次々と否定されていく、そういう「〈戦後〉という時代世相」が、若い歌人たちに何かしらの行動を起こさせたのではないかと思います。

そして、それならば、第一歌集『方代』の冒頭の歌は、『工人』の創刊号に発表された「ゆくところ迄ゆく覚悟あり夜おそくけもの皮にしめりをくるる」の歌の方が、ふさわしいのではないかと思います。実際には、『工人』第二号に「木枯」と題された、八首の歌の中の7番目に載せられた歌「わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒きのれんを分けて出でゆく」の方が、選ばれているのですが、それはなぜかという疑問が当然わいてきます。

「わからなくなれば」という弱い表現よりは、「ゆくところ迄ゆく覚悟あり」と高らかに歌い上げた方が、宗匠主義の打破を目指して、意を決して『一路』から離脱した、若い歌人たちエネルギーを感じさせるのではないかと思います。しかし実際には、『工人』の創刊号に発表された四首のうち、「ゆくところ迄ゆく覚悟あり」の歌は、第一歌集『方代』の第11番目に、「今日は今日の悔いを残して眠るべし」の歌は、第2番目にわざわざ並べ替えられてしまっているのです。

第一歌集『方代』の編集は、岡部桂一郎が担当しています。歌に1番から200番まで算用数字で番号を打ったり、詞書きを設けずに、一つ一つの歌が、独立したスタイルになるように編集されているのは、岡部桂一郎の第一歌集『緑の墓』（白玉書房、1956年）とまったく同じスタイルであることは、前述した笠原伸夫が、その同じ文章の中で指摘しています。

こうして考えると、第一歌集『方代』の冒頭の歌に、「わからなくなれば」の歌を採用したのは、もしかしたら岡部桂一郎だったのかもしれませんが。あるいは岡部と方代の両者の合意によるものであったのかもしれませんが、いずれにせよ、第一歌集『方代』の冒頭の歌には、新しい歌のスタイルを目指す意気軒昂な歌ではなく、「わからなくなれば」という、苦悩する歌人の姿を正直に詠み込んだ歌の方が採用されたことは、以後の方代の歌を考える上で、注目すべき点であると思います。

私自身は、後でも説明しますが、方代がなぜ短歌の文体に、口語や文語、あるいはその混合体といった様々な文体を使うのか。そして、定型歌があるかと思えば、「詩と死・白い^{こぶし}辛夷の花が咲きかけている」（第四歌集『^{かしよう}迦葉』）というような極端に短い歌があったり、「ここらあたりは相^{そうしゅう}州

鎌倉郡^{あざてびろそうあん}字^{ふだ}手^{こも}広^{うばぐち}艸庵の札下げて籠りたり」(第二歌集『右左口』)のような、逆に極端に長い歌があったりするのですが、それはいったいなぜなのでしょう。山崎方代の歌は、生涯にわたって決まったスタイルを持ちませんし、ある意味では、それが方代の歌のスタイルであるとも言えます。

自由奔放な歌といえば聞こえはよいのですが、もしかしたら山崎方代という歌人は、生涯にわたって自分の歌の真実を、さまざまな手法を用いながら探求し続けた歌人であったのかもしれない。

まさに、方代が第一歌集『方代』の冒頭の歌に示した、「わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒きのれんを分けて出でゆく」という行為を、その後もずっと、歌の中で模索し続けた歌人だったのではないかと私は思っています。

以上のように、山崎方代という歌人の原点や、方代の歌人としての生き方を知る上でも、第一歌集『方代』の冒頭に載せられた、歌集成立に関すると思われる歌は、方代研究にとっては欠かすことのできない重要な歌であるとは思いますが、発展学習として使えなくはありませんが、やはり高校の授業の現場では、そこまで生徒に考えさせることはむずかしいのではないかという理由から省きました。

(2)方代に強い影響を与えたと思われる歌

坂出裕子^{さかでひろこ}著『道化の孤独』(不識書院、1998年)の中には、山崎方代の独得な歌風が、どうして形成されて来たのかという問題を考察して、方代に強い影響を与えた文学者やその作品として、詩人高橋新吉、尾形亀之助、歌人吉野秀雄、そして方代が愛唱していた鈴木信太郎訳『ヴィヨン詩鈔』を挙げています。

① たとえば、詩人高橋新吉の有名な『ダダリスト新吉の詩』「38」の影響を受けて、次の歌が作られたのではないかと坂出は推測しています。

『ダダリスト新吉の詩』「38」をまず紹介します。

或時は米を多くし 或時は芋を多くし 毎日おぢやを焚いた 利根川の水を バケツで一杯だけ掬んできて 百匁八銭の味噌を 一杓子づゝ入れて 二股の大根を 満月の夜 小さな隣家の野菜園からひっこぬいて けづつて入れた事もある 柿が熟れて 寝起きに竿で叩き落して そればかり食つてゐた 葉が庭口の軒下に落ち積り 枯れ腐りつゝある どこかの蜜柑を 塀の上か 垣の間から 手を伸ばしてもぎとつて 皮を剥ぐとかぶりつく 非常においしい 食べかすも はながみも ハンケチも 袂の中へ入れて だれも居ない自分のあばら家へ 例もうさんくさく 音のしないやうに 爪先立つて 電燈の紐の たれ下つた下の 布団に入つて寝る

この詩をヒントにして、次の歌が作られたのではないかということです。

滑稽なことではないか或時は芋多くして食いのぼしたり (第三歌集『こおろぎ』)

このように落ちつきはらって軒先のとなりの柿の味をみている (同上)

盗み来し茄子大根もけずり入れて一人^{おごそ}厳かに夕餉を終る (『泥』八号)

② 同じく高橋新吉の詩集『霧島』の「不思議」という詩

あれは地球の壊れる音ではないか。
茶碗の中に梅干しの種が二つある。

詩集『祇園祭り』の「これが」という詩

之が愛だって ——
肩掛けをひきちぎって了った

これらの新吉の詩に触発されて、「2. 山崎方代の歌（抄）」にも選んだ、有名な次の歌が生まれたと指摘しています。

茶碗ちやわんの底に梅干うめぼしの種二つ並びおるああこれが愛いと云うものだ (第一歌集『方代』)

茶碗ちやわんの底に梅干うめぼしの種二つ並びおるああこれが愛うばぐちなのだ (第二歌集『右左口』)

上記の②で引用した歌は、さすがに方代の代表的な歌ですので、「2. 山崎方代の歌（抄）」の中に選びましたが、①で引用した歌は、選ばなかったということです。方代の代表的な歌には、坂出裕子によると、かなり前述した文学者やその作品からの影響が認められるということです。詳しくは、坂出裕子著『道化の孤独』（不識書院、1998年）をご覧ください。そして、そういう方代に強い影響を与えたことがうかがわれる歌についても、方代研究にとっては重要な歌なのですが、「(1)第一歌集『方代』成立に関する歌」と同じ理由で、今回は採用しませんでした。

(3)戦後風景のリアリズムを歌った歌

紅野敏郎が、『「作品」に、のめり込む』という題で、『短歌現代』2003年5月号（特集山崎方代）に載せた文章の最後の方で書いている、「俗の中で生き、俗の中の、日常のさりげない風景を、ほろにがい笑いでうちのめす、したたかな方代イメージ」を感じさせる歌はいいとしても、「猥雑にして切ない戦後風景のひとつとしての、みごもった『女風太郎』を歌った歌などは、さかしらのいわゆる思想を超えた、リアリズムだと思っている」ということで、「かたばみの葉をぬらす雨よ娘はひくく奪っていいのよ奪っていいのよ」の歌を挙げていますが、これに類した歌も今回は採用しませんでした。

たとえば、次のような歌です。

声あげて名物お紺きちがいが唄えば新宿に又夜が来る	13
薄にぶき暈をかむれる月の下奪え奪えとそそのかす声	37
おから寿司水と一緒にのみおろし売られゆく娘にマフラを投げる	38
父知らぬ子を産みおろす若き娘に生の卵を一つ置きて去る	39
おかせしは胎動に耳おしあてて極道邪悪の瞳をかがやかす	60
野毛坂のすずらん燈の灯の下をつれられてゆく淨き女犯よ	91
キリストの寝言に非ず花とばく呼ぶ野毛伝助の声しむるなり	92
東京の星の下にはこおろぎと肌黒き捨児が鳴いておりたり	104

以上の歌は、みな第一歌集『方代』に載っている歌ですが、これらの歌もまた方代の歌の一側面を担っているものです。戦後の荒廃した日本の風景を詠んだ、こうした「さかしらの思想を超

えたりアリズム」は、「2. 山崎方代の歌 (抄)」で選んだ歌からは、おそらくは想像することはできないものと思われます。

「2. 山崎方代の歌 (抄)」では、戦争に関する歌として、「息絶えし胸の上にて水筒の水がごぼりと音あげにけり」という第二歌集『右左口』所収の歌のみを採り上げましたが、

ガメランの樂泌むる夜半の海岸にうちあげられし軍靴ひとつ (第二歌集『右左口』)
狂いたる本間一等兵がタラップの闇に女房の名をよんでいる (同上)

戦争の悲惨な現実を伝える歌として、これらの歌を採用すべきかどうか悩みましたが、今回は見送ることにしました。

5. 方代の歌の表現上の特色

(1) 文体

俵万智の歌とは異なる、山崎方代の口語体 (甲州なまり?) の歌は、方代の歌に独得な雰囲気醸しだして、なぜか読者を引きつけます。しかし、「2. 山崎方代の歌 (抄)」で選んだ歌を見ただけでも、方代の歌は、確かに口語体の歌の方が目立ちますが、実は、口語体の歌ばかりではありません。文語体の歌もあれば、口語と文語の交ざった混合体の歌もあって、実にさまざまな文体を駆使していることに気づかされます。

① 口語体の歌

茶碗ちやわんの底うめぼしに梅干うめぼしの種二つ並びおるああこれが愛いと云うものだ
土の上に黒い小さいかげを持ちおれはおのれの歩みをつづける
おのずからもれ出る嘘うそのかなしみがすべてでもあるお許しあれよ
生うまれは甲州こうしゅう 鶯おうしゅう 宿おうしゅう 峠とうげに立っているなんじゃもんじゃの股またからですよ
死ぬほどの幸せもなくひっそりと障子しょうじの穴をつくろっている
ようやくかぎあなに鍵穴に鍵をさし入れるこの暗がりのうらがなしさよ
こんなにも赤いものかと昇る日を両手に受けて嗅いでみた
あかあかとほほけて並ぶきつね花死んでしまえばそれっきりだよ
ろうそくの炎をつつむくら闇やみは摺つかんでみたが手ごたえがない
ふるさとの右左口郷うばぐちむらは骨壺こつぽの底にゆられてわがかえる村
真白てあみい手編えりのセーターの衿えりの裏にあなたの名前がぬいこんである
声をあげて泣いてみたいね夕顔なんてんの白い白い花が咲いてる
一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております
私が死んでしまえばわたくしの心の父はどうなるのだろう
不二ふじが笑っている石が笑っている笛吹川ふえふきがわがつぶやいている
一粒の卵のような一日をわがふところに温めている

② 文語体の歌

かぎりなき雨の中なる一本の雨すら土を輝きて打つ
息絶えし胸の上にて水筒の水がごぼりと音あげにけり

瑞泉寺の和尚がくれし小遣いをたしかめおれば雪が降りくる
 赤き色のマッ치의軸の火が赤し恋はほのかに遂げしめ給え
 大正三年霜月の霜の降るあした生まれて父の死を早めたり
 笛吹の石の川原を越えてゆくひとすじの川吾が涙なり
 しのめの下界に降りてゆくりなく石の笑いを耳にはさみぬ
 青葉しげれる若宮大路にてゆくりなくめぐり逢いたりあなたなりけり
 めずらしく晴れたる冬の朝なり手広の富士においとま申す

③口語と文語の混ざった混合体の歌

ポケットの底にかかわけるもみ粒を母よ母よと噛みしめるなり
 庭土をわずかにそめてひっそりと雪がやんでおる死ぬるは易し
 すてられし下駄にも雪がつもりおるここに統一があるではないか
 柚子の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ
 それはそれは山の獣も知らざりし寒き夜ふけを母は死にたり
 担ぎだこ取れし今でももの見れば一度はかついでみたくなるのよ
 こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり
 こころあたりは相州鎌倉郡字手広艸庵の札下げて籠りたり
 盲いてゆく臍をとじて遠きひと姉の名を呼ぶ弟なれば
 手のひらをかるく握ってこつこつと石の心をたしかめにけり
 ある朝の出来事でしたこおろぎがわが欠け茶碗とびこえゆけり
 卓袱台の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり
 くろがねの錆びたる舌が垂れている鬼はいつでも一人である
 生きていたか生きておったか白足袋の寺の和尚が来てたもうたり
 まっ黒く澄みたる馬の目の中に釜無川が流れている
 親子心中の小さな記事を切りぬいて今日の日記を埋めておきたり
 間引きそこねてうまれ来しかば人も呼ぶ死んでも生きても方代である
 留守という札を返すと留守であるそしていつでも留守の方代さんなり
 かくのごとく生きていることを恥じながらもげしボタンをくくり付けたり
 馬の背の花嫁さんは十六歳方代さんのお母さんなり
 うつし世の闇にむかっておおけなく山崎方代と呼んでみにけり

平成11年(1999)9月4日、瑞泉寺で行われた方代忌で、奥村晃作は、「昭和の西行であり、啄木である一昭和に占める方代の位置」と題した講演の中で、奥村は方代が「文語口語混合体」の歌のスタイルを創出したことを高く評価しながら、次のような話をしています。少し長くなりますがその部分を引用したいと思います。この話の出典は、「方代研究第26号」です。

昭和21年の初夏の頃、戦傷をおった山崎方代は外地から病院船で帰還。その後入退院を繰り返し、年の暮れ退院と年譜にある。明けて22年一月号から、『一路』に復帰して出詠を続けている。ところが翌23年6月末に仲間と『一路』を離脱し、十月に創刊された『工人』に拠ることになったのである。岡部圭一郎が代表格であるが、今から観察すれば山崎方代のために創出された新しい場であった。

昭和の西行・啄木はこの場で一気に生誕したのであった。『工人』創刊号において驚くべき短歌革命〈が成し遂げられていたものであった。方代は、創刊号に四首の歌を載せているがそれらを次に引く。

ゆくところ迄ゆく覚悟あり夜おそくけものの皮にしめりをくるる
寂しすぎる記憶のつづき今日も又くされし靴に木釘を打ち込む
今日は今日の悔を残して眠るべし眠れば明日があり闘いがある
死なずして帰り来し部屋にけだものの黒猫の眼がきらりと光る

戦前の方代短歌は「けり、かも」の詠嘆調の抒情味たっぷりのものであったが、それらをかなぐり捨てて、四首とも動詞の現在形で止めてある。これは、戦後短歌の基本形の一つではなかったか。しかも黙しての「新かな」への切り替え。「文語口語混合体」の創出。三首目がそれだが、さらに分かりやすい例を近くの作から二首引く。

仕末のつかぬ俺の所業にてこずって身をけずる姉が浅間町にあり
白い靴一つ仕上げて人なみに方代も春を待っているなり

一首目。下の句の文語脈を基調としながらも上の句は口語脈で語っている。つまり「文語口語混合体」の歌である。

終戦直後の戦後短歌の出発の際に、方代はすでに、「文語口語混合体」の歌を詠んでいたのがある。他の歌人たちの歌は五十年かかって世紀末の今日にいたって、この歌体に到達している。「白い靴」などという表現を、当時において方代以外の誰が成しえたであろうか。今でこそ当たり前の口語表現たる「白い靴」が昭和25年の時点において方代短歌においては可能だったのである。

方代最晩年の歌（死後の刊行となった『迦葉』^{かしよう}）から四首を引く。

ことことと小さな地震^{な い}が表からはいって裏へ抜けてゆきたり
うつし世の闇にむかっておおけなく山崎方代と呼んでみにけり
冬の陽が真綿のように射し込んで大正三年も遠くなりたり
戦争が終わった時に馬よりも劣っておると思ひ知りたり

四首とも上の句は口語表現だが、結句は文語できっちりと締めている。これが二十世紀短歌の到達地点であり、方代ならずとも大方の歌人はこの地点まで至っている。次世紀短歌はどういう展開になるであろうか。

方代がつとに成し遂げ、大方の歌人がいまだにプログラムにのせていない所の「旧かな」から「新かな」への転換、これは二十一世紀の初頭に加速を見ること私の目には瞭然たる景である。
(平成11年[1999] 9月4日・方代忌瑞泉寺での講演より)

奥村晃作によると、①動詞の現在形止め、②「旧かな」から「新かな」への切り替え、③「文語口語混合体」の創出といった点が、方代短歌の特色だということです。特に、「文語口語混合体」の創出は、他の歌人が戦後50年かけて到達した文体であって、方代はそれを戦後間もない30代ですでに為し得ていたということです。さらにそのことは〈短歌革命〉と呼ぶべき出来事であると、奥村は、最大限の賛辞を方代に対して送っています。

しかし、「二十世紀短歌の到達地点」であるとまで奥村の言った、「上の句」を「口語表現」に

して、「結句は文語できっちりと締め」といった表現形式については、今回「2. 山崎方代の歌(抄)」の中で引用した歌を見る限りにおいては、必ずしもその形式ばかりではないようです。私自身は、そこまで方代が表現形式を確立したとは言い切れないのではないかと考えていますが、いかがなものでしょうか。

(2) 俗語の使用

「ただそれだけのことなのよ」、「かついでみたくなるのよ」という女言葉は、日常会話の中で、普段方代が使っているのかどうかはわかりませんが、やわらかい感じをうけることは確かです。しかし、その反面歌の格調や調べが低くなることも事実で、方代は、あえてそういう言葉を使用することで、歌の既成概念に対して、一つの挑戦をしていたのかもしれない。

「お許しあれよ」、「呑んでしもうた」というのは、今度は老人の言葉のようです。「生きておったか」と言ったのは、「(瑞泉寺の)和尚」ですから、意識して老人が話している雰囲気を出しているのではないかと思います。「茶碗の底に梅干の種二つ並びおる」、「雪がつもりおる」、「小遣いをたしかめおれば」、「吾はおるなり」という「おる」という語は、甲州なまりなのか、老人言葉なのか、あるいはその両方なのかはわかりませんが、これらも歌に独得な雰囲気を醸し出しています。

他の表現としては、「ああこれが愛と云うものだ」、「死んでしまえばそれっきりだよ」、「声をあげて泣いてみたいね」などという表現を使っていますが、よくこれだけさまざまな表現が思いつくものです。

(3) 語りかけの技巧

「柚子の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ」、「生れは甲州鶯宿峠に立っているなんじゃもんじゃの股からですよ」、「担ぎだこ取れし今でももの見れば一度はかついでみたくなるのよ」、「あかあかとほほけて並ぶきつね花死んでしまえばそれっきりだよ」、「留守という札を返すと留守であるそしていつでも留守の方代さんなり」、「声をあげて泣いてみたいね夕顔の白い白い花が咲いてる」、「片付けておかねばならぬそれもまたみんな忘れて呑んでしもうた」、「一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております」、「馬の背の花嫁さんは十六歳方代さんのお母さんなり」、「めずらしく晴れたる冬の朝なり手広の富士においとま申す」

「ただそれだけことなのよ」、「股からですよ」、「かついでみたくなるのよ」、「それっきりだよ」、「方代さんなり」、「泣いてみたいね」、「呑んでしもうた」、「知っております」、「お母さんなり」、「おいとま申す」といった語りかけの技巧は、第一歌集『方代』から第四歌集『迦葉』に至るまで、すべての歌集の中に出てきます。これはいったい誰に向かって語りかけているのでしょうか。

「めずらしく晴れたる冬の朝なり」の歌だけは、富士山に対してであることはわかりますが、これらの歌を詠む読者は、それが読者本人に対して語りかけられているとまでは思わないでしょうが、まるで人なつっこい田舎のおじいさんが、優しく話しかけているような、そんな感じを受けるのではないのでしょうか。

「なり」という断定の助動詞が使われている歌もありますが、ここでは「方代さんである」、「お母さんである」というきつい言い方よりは、むしろ「方代さんなのですよ」、「お母さんだったのですよ」と、やさしく言われているような印象を受けます。

こういった文体を採用しているのは、当然読者を意識しているわけですが、たとえば歌人尾崎左永子は、「柚子の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ」の歌を評して次の

ように述べています。

湘南には柚子や柑橘の木が多く、鎌倉のふとした路地などで、その黄に輝く丸い実が、天から降って来たように地に転がるのを見かけたことがある。この歌の好きなのは、上の句の「さんらんと地を打って落つ」の「さんらん」の語感が実によく活きていることが第一。当然「燦爛」であって、冬の日の光をいっぱいに含んでいる「輝き」のイメージなのだが、一方で「散乱」という文字と内容を重ねてしまう。仮名表記であるゆえに、その両方の語が重層的に読者のイメージをふくらませる。語に勢いがあるのだ。

第二は上句と下句の対立の魅力である。熟れ切った柚子の黄の輝く動きに、一瞬、びっくりし、感動し、さて急にわれに返るのである。「ただそれだけのことなのよ」と呟くように言い放つのは、「醒めた眼」のように一見感じられるのだが、そこには小さなことに感動した自らへの含羞があり、自然と人間との関わりを達観した視線がある。

（「方代研究」第26号より）

さすがに歌人だけあって、その鑑賞眼の深さには感心します。もし作者の歌を作る際の主眼が、「柚子の実がさんらんと地を打って落つ」という情景にのみあったとするならば、それだけで一首が完結しただろうと思われます。これが仮にアララギ派の歌人であったならば、そういう写生の歌を詠んだことでしょうし、その観点からすれば、方代のこの歌の下句「ただそれだけのことなのよ」は、蛇足であり、非難されかねないことになってしまいます。おそらく、かつて方代の歌が評価されなかったとすれば、方代のそういう部分であったのではないのでしょうか。

しかし、方代の思いが、写生の歌だけに終わらせたくなかったことは、ほぼ間違いのないことであろうと思われます。むしろ「ただそれだけのことなのよ」という言葉を、下の句にわざわざ入れたところに、方代のこだわりがあり、方代の歌のアイデンティティーがあったのだと思われます。要は、その表現が成功しているかどうかにかかっているわけですが、少なくとも上記にみられるように、尾崎左永子はその表現を評価し、近年、歌人以外でも多くの人々が方代の歌を詠むようになったのも、そういう方代の表現を支持したからであると思われます。

それが、紅野敏郎の言うように、「したたかな方代」の作戦であったのかもしれませんが、読者の多くは、そういう表現の中に人の温かみ感じたり、居心地の良さを体感したりするのではないのでしょうか。

(4)意外性と省略

たとえば、第四歌集『迦葉』^{かしよう}の中に、次のような歌があります。

欄外の人物として生きて来た 夏は酢蛸を召し上がれ

上の句の「欄外の人物として生きて来た」というのは、理解できなくはありません。生涯定職や妻子を持たず、住む家も人の好意によってあてがわれて、どうにかこうにか生きて来たということを言っているのだだろうと思われます。晩年はまだ傷痍軍人としての恩給が支給されて、それなりの生活をすることができましたが、それまでは、安い焼酎を飲み、山菜などを採って来ては食べるといった具合で、かろうじて生きながらえて来たわけです。そういう自分のことを指して「欄外の人物」と表現したのだだろうと思います。その方代の生き方を、坂出裕子^{さかでひろこ}は「道化の孤独」と表現し、田澤拓也は「無用の達人」と表現したわけです。

しかし、「欄外の人物として生きて来た」という上の句と、「夏は酢蛸を召し上がれ」という下の句は、どう結びつくのでしょうか。その間には、あまりにも大きな落差があると言わなければなりません。本来であるならば、作者がもう少しその省略された部分を説明するか、あるいは読者が想像できるように配慮すべきではないかと思います。このままでは、あまりにも唐突すぎて、歌を鑑賞したくてもその手がかりさえつかめません。

では、なぜこのような表現方法をとるのでしょうか。大下^{いっしん}真著『山崎方代のうた』では、次のように解説しています。

「欄外の人物として生きて来た」と言葉を起こして、次に何が語られるのかと読者に期待を抱かせる。「欄外の人物として生きて来た」というのは、なかなか魅力的なフレーズである。ずっしりとした人生の重みを感じられる。ところが、一字空けて、「夏は酢蛸を召し上がれ」で、読者の期待のつかい棒は外され、思わずよろめく、短歌的予定調和をものの見事にひっくり返して悦に入っている作者のしたたかさが見えるのではないか。

こうした、「短歌的予定調和をものの見事にひっくり返し」た歌としては、「2. 山崎方代の歌(抄)」で選んだ歌の中にも、いくつか見ることができるのではないかと思います。たとえば、次のような歌がそれに該当するかと思います。

茶碗^{ちやわん}の底^{うめぼし}に梅干^{うめぼし}の種^{うめぼし}二つ並びおるああこれが愛と云うものだ
すてられし下駄^{げだ}にも雪がつもりおるここに統一があるではないか
柚子^{ゆず}の実がさんらんと地を打って落つただそれだけのことなのよ
それはそれは山の獣も知らざりし寒き夜ふけを母は死にたり
死ぬほどの幸せもなくひっそりと障子^{しょうじ}の穴をつくろっている
こんなにも湯呑茶碗^{ゆのみちやわん}はあたたかくしどろもどろに吾^{われ}はおるなり
くろがねの錆^さびたる舌^{した}が垂^たれている鬼^{おに}はいつでも一人である
ろうそくの炎をつつむくら闇^{やみ}は掴^{つか}んでみたが手ごたえがない
ふりむくと己^{おの}れの影がついて来る月かげなれど味方^{みかた}でもある
声をあげて泣いてみたいね夕顔^{ゆげん}の白い白い花が咲いてる
片付けておかねばならぬそれもまたみんな忘れて呑^のんでしもうた
一度だけ本当の恋がありまして南天^{なんてん}の実が知っております
しのめの下界に降りてゆくりなく石の笑いを耳にはさみぬ
めずらしく晴れたる冬^{あした}の朝^{てびろ}なり手広^{てひろ}の富士においとま申す

6. 山崎方代の故郷と習作時代の歌

山崎方代は、大正3年(1914)に、山梨県右左^{うばぐち}口村上宿(現東八代郡中道町)で、貧しい農家の八人兄妹の末っ子(次男)として生まれました。父龍吉^{りゅうきち}65歳、母けさの44歳の時の子でした。

生^{うま}れは甲州^{こうしゅう}鶯宿^{おうしゆく}峠^{とうげ}に立っているなんじゃもんじゃの股^{また}からですよ
馬^{うま}の背^{はなよめ}の花嫁^{はなよめ}さんは十六歳^{はうだい}方代^{ほうだい}さんのお母^{お母}さんなり

「生^{うま}れは」の歌は、第二歌集『右左^{うばぐち}口』に、「馬^{うま}の背^{はなよめ}の花嫁^{はなよめ}さんは」の歌は、第四歌集『迦葉^{かしよう}』

に載せられている歌です。

母けさのは、鶯宿峠^{おうしゆくとうげ}の先にある鶯宿村^{うばぐち}から右左口村へ嫁いで来たそうです。しかし、実は母けさのは、明治3年(1870)生まれで、明治24年(1891)に結婚していますので、母が嫁いで来たときは、方代の歌にあるような「十六歳」ではなく、「二十一歳」であったのです。方代の歌には、このように事実と異なり虚飾されていることが多く、方代の歌の中で詠まれていることは、あくまでも歌の中という虚構の世界での話とわりきった方がよいようです。

方代が生まれた時には、八人いた兄弟のうち五人は夭折して既にいませんでした。長女くまと五女ひでこの二人の姉がいるばかりでした。しかし、姉くまは里子に出されていて、両親、五女ひでこと四人暮らしたそうです。

方代という名前は、本名です。彼の第三歌集『こおろぎ』の中には、彼の一風変わった名前の由来をうかがわせる次のような歌があります。

間引き^{まび}そこねてうまれ^こ来しかば人も呼ぶ死んでも生きても方代である

方代の七人いた兄弟たちは、前述したように、二人の姉を除いてみな若くして亡くなっていますが、特に長男を亡くした時の父龍吉の悲しみは大変なものだったそうです。ショックから一週間も倉の中に閉じこもっていたことが、方代の随筆集『青じその花』(かまくら春秋社)の中に書かれています。つまり方代は、大事な跡取りである長男に先立たれた父龍吉が、その心の痛手から、次に生まれてくる方代に対しては、「生き放題、死に放題」勝手にせよという意味で命名したということです。この話は、方代が大人になってからも何度も周囲の人に吹聴していたようですが、しかし私は、この話をあまり真^まに受けてはいません。これでは、方代の父親はずいぶん冷たくいい加減で、無責任な親ということになってしまいます。

おそらく事実は逆で、長男に先に死なれた両親は、方代の誕生をこの上なく喜び、可愛がったのではないかと思います。事実、同じ『青じその花』の中には、男子誕生の祝いに古宿の岩山を父が買ったことが、一方では載せられています。そして方代の父は、大きな石ばかりで、土のまったく見えない深い谷底を切り開いて、桑畑を作り上げたそうです。父はその際、いつも幼い方代をそばの石に座らせて、毎日毎日汗水垂らして働きました。母が持って来る遅い昼食を、三人なら一緒に食べたことは、今でも忘れられない大切な思い出であるということが、その本の中で切々と語られています。

方代は、父龍吉65歳、母けさ44歳の時の、両親の年行ってからの子どもではありましたが、しかし、決して「間引きそこねてうまれ」て来たわけではなく、両親待望の男の子だったのだと思います。それでは、なぜ方代は、そういう誤解されかねないような歌を詠んだのでしょうか。

「生^{うま}れは」の歌にせよ、「間引きそこねて」の歌にせよ、おそらくは謙遜して、自分はたいした人間ではありませんよということを、彼一流のユーモア、あるいはおとぼけで詠んだものなのではないかと思われます。こうして、面白おかしく自分を紹介していれば、相手も読者も、自分を警戒せずに受け入れてくれるだろうと思ったのではないのでしょうか。もしかしたら、こういう自己を謙遜したり卑下したりすることが、生涯定職を持たなかった彼の処世術であったのかもしれない。

大正三年霜^{しもつき}月の霜降るあした生まれて父の死を早めたり (第二歌集『右左口^{うばぐち}』)

ところが、父を詠んだ歌になると、そうしたおとぼけは一変します。前にも書きましたが、方代は、大正3年11月1日に生まれています。「あした」は早朝の意味ですので、「大正三年霜月の

霜降るあした生まれて」というのは、方代自身のことだと思われます。そしてこの歌の中では、自分が生まれたことが父の死を早めてしまったと歌われているのです。

しかし、父龍吉は、太平洋戦争終戦間際の昭和19年（1944）に、94歳という長寿で亡くなっています。決して方代が生まれたことが、父の死を早めた原因ではありませんし、そもそも父龍吉が亡くなったときには、方代は戦争にとられていて、父の死に目に会うことはできませんでした。方代が父の死を知ったのは、亡くなってから二年後の、戦争から帰還した昭和21年（1946）のことだったのです。

ということは、「大正三年霜月の霜降るあした生まれて」の歌は、どのように理解したらよいのでしょうか。

この歌の意味を、実は方代自身が解説をしています。

これはいい歌だと思うんだ。両親があるでしょう。子どもをひとり生むともうこの両親は死んでもいいようになっていく。だから、そういう話で、子ども生んだらもう親の責任果たしてもう死んでいけばいいんだから…。あまり長生きしちゃいけない、なんて、そうじゃないけどね、哲学的に言えばそういうことだね。

（「方代の対談」方代研究8号より）

この歌は方代自身がいい歌だと言っているわけですから、彼の自信作ということになるかと思います。そしてこの解説は、一方では方代の歌の特色をも言い表しているのではないのでしょうか。つまり、方代が歌に求めたものは、現実の側面を写實的に切りとってみせるリアリズムにあったのではなく、歌を象徴的に詠むことによって、人生の本質や深奥に迫ろうとする点にあったのではないかということです。とかく方代の人となりや、生き方の方にばかり目が行きがちですが、彼の歌を詠むことの最大のねらいが、そこにあったのではないかと私は考えています。

そのために、方代は実にさまざまな文体を駆使します。前述したように、口語体の歌もあれば、文語体の歌もあるし、口語と文語の入り交じった混合体の歌もあります。ときには、女言葉や甲州なまりのような言葉も使いますし、定型の歌もあれば、破調の歌もあります。場合によっては、事実を曲げてまでも、短歌の世界の中での表現にこだわったのです。

おのずからもれ出る嘘^{うそ}のかなしみがすべてでもあるお許しあれよ（第二歌集『右左口』^{うばぐち}）
方代の嘘のまことを聞くために秋の夜ながの燐が赤しも（同上）

山崎方代は、人に対するサービスからなのか、冗談なのか、ありもしないことをさもあったかのように、どんどん話をふくらませてしまう性癖があったようです。前述した吉野秀雄が方代について述べた「ある〈変わり者〉の身辺」の中でも、「失恋話が多く、相手の女性はどしどし変わっていく。」と書かれてあります。調子にのって話していくうちに、前言った話とつじつまが合わなくなったことは、しょっちゅうあったようです。

それがまだ、酔った席での話であったり、病床に就いている吉野秀雄を励ますために、ついた嘘であればよいのですが、それが作品上にもしばしば現れて、詠む人を困惑させたりもします。

馬の背の花嫁^{はなよめ}さんは十六歳方代^{ほうだい}さんのお母さんなり

前述した歌の中で、母の嫁いだ年齢をごまかすぐらいならまだいいのですが、次の一連の歌は、有名な歌ではあるのですが、ちょっといかななものかと思います。

一度だけ本当の恋がありまして^{なんてん}南天の実が知っております (第三歌集『こおろぎ』)
はぎしりして^{かなしき}鑢を打つ靴を打つときの間もあり広中淳子 (第二歌集『^{うばぐち}右左口』)
和歌山の汐見通りのぬかるみにぬぎすてし古い靴さようなら (『工人』昭和24年11月号)

二首目に詠まれている「広中淳子」というのは、実在した『工人』の地方会員です。彼女の詠んだ歌の内容からすると、彼女は当時肺結核を患っているらしいということでした。そして実際に方代は、和歌山に住む彼女の家を、訪れてもいるのですが、そのことを、文学の中でも、人に対する世間話の中でも、方代はさかんに尾ひれをつけて、吹聴するのです。

しかし実際には、方代の一方的な片思いで、しかもそれは、広中からすれば会ったこともない人から、いきなり訪問を受けてのプロポーズだったことが、田澤拓也著『無用の達人山崎方代』(角川書店、平成15年発行)に載っています。詳しくは、そちらの方を参照してください。

現代の人権意識からすれば、公になる作品の中に、相手の了解も得ないで実名を載せるなどということは、許されるはずがありません。しかも、お互いが愛し合っていたかのような印象を持たせてしまうのは当然行き過ぎで、こういったことも決して許されることではありません。こうした行き過ぎたところが方代にあったこともまた事実なのです。

話を戻します。方代は、母けさのが亡くなる昭和12年(1937)まで、故郷山梨の^{うばぐち}右左口村に、大好きな両親と一緒に生活していました。ところが、母が亡くなると、翌昭和13年(1938)には、家や父の耕した土地はもちろんのこと、家具類すべてを売り払って、父とともに姉くまの嫁ぎ先である、横浜市西区浅間町に移って来ます。百姓である父が土地を捨てて、村を離れるということとはよほどのことで、実は晩年の方代の両親は、前述したようにともに眼を患い、ほとんど目の見えない状況だったのです。

方代が、まだ山崎一輪という筆名で、出詠していた頃の歌のいくつかを、次に紹介したいと思います。出典は、昭和11年十月号の『一路』です。方代22歳の時の作です。

貧しければ眼科博士にも見せずして遂につぶせしちちの眼ははの眼
^{なげ}歎けども今はすべなしせめてわれみ親にやさしき子とならむかも
めしひたる父と母とを思ほえば堪へられなくに人の子にして
どこまでも運命の手の冷たさよちちにつづきて盲^{めしひ}となりし母
めしひなる父母を思へばうら若き恋もよそほひもすつべかりけり
畑をうり田をうりしかどふた親のおん目は遂につぶれたりけり

これらの歌は、晩年放浪の歌人として有名になった、いわゆる方代調の歌とは異なりますが、眼を患った両親をかばいながら、恋愛をあきらめて懸命に生きようとしている方代の姿が彷彿として浮かんで来て、胸を打ちます。また次のような歌もあります。

妻めとれと云ふをことはり家に帰る夕炊ぐ母を寂しみにけり
めしひなる母が洗ひし敷布なり横たはりつゝあつきまなうら

母は見えないながらも、炊事をしたり洗濯をしたりしていたことがわかります。そして、親孝行な息子の将来を案じて、自分たちのことよりも、方代に奥さんをもらって、幸せな家庭を築くことを諭している様子もうかがわれます。そして方代は方代で、そういう両親を見捨てるわけにもいかず、恋も結婚もあきらめようとしていることがうかがわれます。

これらの歌から想像できることは、貧しく大変な寒村の生活ながらも、方代にとっては、かけがえのない幸せな両親との生活であったことがうかがわれるのではないのでしょうか。

ところがその生活も、母が病気で床に伏しがちになると、障害を持った年老いた両親を抱える生活に深刻の度合いが増し、さすがの方代も、生活を支えるために外に働きに出かけることさえできなくなっていくのでした。次は、昭和13年一月号の『一路』に掲載された歌です。

つね母がすわりし場所に座をかへて父にくはしむ夕おそき餉
めしひなる父を寝させて病む母を守りうつうつ朝をまちをりぬ
病む母のかたへにありて父泣けりわれは泣かじとうつむきてゐる
七日目の朝しらじらと母君の肉なき体ぬぐひてやりぬ
もの視えぬまなこひらきて父を呼びわが名をよびてまた^{ねむ}睡るらし
母にのます粥をにながら思ふなり山は今宵も落葉するらむ

ちょうど高齢化社会である現在、寝たきり老人を抱える家庭と同じような大変さを、方代は、たった一人で抱えていたのです。おそらくは、24時間片時たりとも両親から目が離せないような、そんな大変な状況が続いていたものと思われます。仕事に出られないのですから、家に残るわずかな家具や、父が苦勞して開墾してきた桑畑でさえも売り払わなければ、生活が成り立たなかったのではないかと思います。

そして、昭和12年（1937）最愛の母けさは、遂に亡くなってしまいます。享年69歳でした。

右の手を姉にまかせて左手をわれにもたせて死にけり母は
めしひなる父を護りて世に克てと死ぎは近き母ののたまふ
それはそれは山の獣も知らざりし寒き夜ふけを母は死にたり
亡母思ひつかれて庭に眼をやりぬ南天の実の赤かりにけり
(『一路』昭和13年二月号) (同上) (第二歌集『右左口^{うばぐち}』) (『一路』昭和13年三月号)

こうして、残された父龍吉と方代は、すべてを処分して村を離れ、横浜の歯医者に嫁いでいた姉くまを頼って、親子で移って行ったのでした。方代24歳の時です。母が眠り、父が死にものぐるいで耕した桑畑のある郷里右左口村^{うばぐち}を捨てて出て行くことは、父龍吉にとってもそして方代にとっても、断腸の思いであったことでしょう。

ふるさとの右左口郷^{うばぐちむら}は骨壺^{こつぼ}の底にゆられてわがかえる村 (第三歌集『こおろぎ』)

以上に見られるように、山崎方代がまだ山崎一輪という筆名で、山下陸奥の主宰する『一路』に投稿していた頃の歌は、文語体の歌で、きわめてオーソドックスな歌風であったことがわかります。

それは、「心の花」の流れをくむ『一路』の、奇に走らない〈正常なる短歌〉を目指した現実的な歌風を、習作時代の山崎方代は、忠実に学んで歌を詠んでいたからだと思われます。

晩年の方代調と言われる型にはまらない自由奔放な歌の下地には、まずこのようなオーソドックスで「正しい歌」を学んでいた習作時代があったことを、まず押さえておく必要があると思います。そしてまたそうした下地があったからこそ、晩年のユニークな方代短歌が開花したのだと思います。

その〈正常なる短歌〉を目指して『一路』で学んでいた方代ら若い歌人達が、新たな歌境を開くために、『工人』を創刊し、分離独立していったことは前述した通りですが、師匠から離れた以

上、独自の歌風を築くために、文体や形式を始め、およそ考えられるありとあらゆることが模索され、試みられた結果が“方代の歌”になって行ったのではないかと私は思います。

そしてその後、方代は、昭和16（1941）臨時招集され、千葉高射砲隊に配属されます。やがて南方に派遣され、台湾、マレー、シンガポール、スマトラ、ジャワと転戦して、昭和18年（1943）29歳の時に、チモール島クーパンの戦闘で、砲弾片を浴びて右眼を失明し、左眼も視力0.01という弱視になって、昭和21年（1946）に、傷痍軍人となって復員したのです。

方代が戦争にとられている間に、父龍吉が亡くなったのは前述した通りですが、『青じその花』の中で、方代は父を評して、次のように述べています。

「父も母も、根っからの、どん百姓の生まれで、世にも不思議なまずしいものを食べて暮らしていた。主食はもろこしが多かった。どん百姓、いい言葉だなあ。私はこのどん百姓が好きで、どん百姓の父をだれよりもえらい人であったと、今でも信じている。」

おそらく、方代親子が村を出て行くときに、方代はいつか郷里に戻って、父と母と楽しく暮らした時ような、百姓生活をするのを夢見て出て行ったのではないのでしょうか。

ところが、傷痍軍人として復員した方代にとって、職はなかなか見つからず、たまに得た仕事も長続きせずになかなか定着することができませんでした。妻も生涯持つことはありませんでした。靴修理工として働いたり、横浜で風太郎（日雇い労働者）として、埠頭で荷の積み卸しをしたり、姉くまが亡くなるまでは、姉の嫁ぎ先の歯科医院で、歯科技工士の見習いとして働いたりしますが、その姉が亡くなると、居候をしていた姉の家を出て横浜の市内を転々として、留守番として住み込んだり、昭和43年（1968）には、同市戸塚区（現栄区）田谷の農家の納屋に移り住み、農事手伝いの生活を始めたりしました。方代54歳の時です。

その頃の様子を伝える話が、高村壽一の著『石の心を 山崎方代という歌人』（邑書林）に書かれています。

納屋には電気がきていた。コンセントに電気コンロや若い知り合いが呉れた中古電気釜をつなぐ。住まいの四畳半のほか流し台がついていたものの水道がない。水は近くの市立千秀小学校の運動場にある水道蛇口にバケツをさげて貰いに行っていた。

この納屋を、方代は「方代^{そうあん}艸庵」と呼びました。手広に越してからも、「方代^{てびろ}艸庵」の名前は引き継がれたのでした。

方代が注目されだしたのは、この田谷時代からで、昭和42年（1967）、「短歌」十月号の吉野秀雄追悼号に「方代の歌」50首を発表したことや、翌年9月15日付けの毎日新聞に「方代の歌」五首が紹介されたあたりからでした。

7. 略歴

山崎方代の略歴については、『山崎方代全歌集』（不識書院、1995年発行）の巻末にある「年譜」（島崎ふみ製作）と、鎌倉瑞泉寺の現住職で、歌人でもある大下一真著『山崎方代のうた』（短歌新聞社、2003年発行）の巻末にある「山崎方代の略年譜」を参考にしました。

山崎方代は、大正3年（1914）に、山梨県右左口村^{うばぐち}上宿（現東八代郡中道町）で、貧しい農家の八人兄姉の末っ子（次男）として生まれました。父龍吉^{りゅうきち}65歳、母けさの44歳のときの子でした。

高等小学校卒業の頃から歌を作りはじめ、昭和7年(1932)18歳の時に右左口村^{うばぐち}の短歌会『地上』に山崎一輪名で、初めて出詠しました。その後、地元の新聞や雑誌等に短歌や小説を投稿していましたが、昭和11年(1936)22歳の時には、青年団文芸部長として文芸雑誌を編集しています。同じ頃『水甕』『あしかび』に出詠し、『一路』に入会して、さかんに作歌活動をしています。昭和12年(1937)23歳の時には、『一路』を主宰している山下陸奥に会うために、わざわざ上京しています。母からなけなしのお金をもらって、山中湖畔で開かれた『一路』の懇親大会へも喜んで出席しています。

同年11月に母けさのが亡くなると、翌昭和13年(1938)1月、24歳の時に、家財道具等すべてを処分して、右左口村^{うばぐち}を離れ、父龍吉とともに横浜に住む姉関くまのもとに身を寄せました。昭和16年(1941)に応召され、昭和18年(1943)29歳の時に、戦地で右眼を失明し、左眼の視力も0.01という状況になりました。戦後作歌活動を再開しますが、昭和23年(1948)には、宗匠主義の打破を目指して、『一路』を離脱し、山形義雄、岡部桂一郎、竹花忍、長倉智恵雄、芝山永治らと『工人』創刊に参加します。その頃の方代は、靴の修理をしたり、横浜の風太郎になったり、姉の所で歯科技工士の見習いをしたりと、転々と職を変えています。『工人』終刊後は、『黄』創刊に参加して、昭和30年(1955)には、念願の第一歌集『方代』を自費出版します。方代の41歳の時でした。第一歌集『方代』は、駅で見ず知らずの乗客に配ったり、多くの文学者に一方的に送られたりしましたが、そうした中で会津八一から賞賛の葉書が届きました。

昭和33年(1958)44歳の時に、『泥』創刊に参加します。泥の会のメンバーには、岡部桂一郎、片山貞美、金子一秋、葛原繁、竹花忍、山崎一郎などがいました。翌年には、笠原伸夫が編集発行者を務める『復活工人』創刊にも参加しています。昭和37年(1963)49歳のあたりから、方代は鎌倉の吉野秀雄の家を訪れ始めています。

昭和40年(1965)51歳の時に、それまでずっと方代を庇護してくれていた姉関くまが亡くなると(享年70歳)、横浜市内を転々とした後、横浜市戸塚区(現栄区)田谷^{たや}の農家の農機具置き場であった納屋に住み込んで、農作業を手伝ったりしていました。

方代が、歌壇で注目を浴びるようになったのは、昭和42年(1967)53歳の時に、敬愛していた吉野秀雄が亡くなったことがきっかけでした。吉野秀雄追悼特集号「短歌」十月号に発表した、「方代の歌」五十首が評価されたのです。翌年9月15日の毎日新聞に、方代の写真とともに「方代の歌」五首が掲載されたのですが、この中に、鎌倉瑞泉寺^{ずいせんじ}の歌碑に採用された「手の平に豆腐をのせていそいそといつもの角を曲^{まが}りて帰る」の歌があります。この毎日新聞に載ったあたりから、方代は世間でも注目されるようになります。

昭和45年(1970)56歳にしてようやく、長年の念願であった山崎家一族の墓を、郷里右左口村^{うばぐち}の七覚山円楽寺に建てることができました。

翌年には、岡部桂一郎らと同人誌「寒暑」を創刊します。他のメンバーに、山崎一郎、片山貞美、玉城徹らがいました。

昭和47年(1972)58歳の時には、鶴岡八幡宮前に中華料理店を営む根岸^{てるお}兎雄氏の好意によって、鎌倉手広にある根岸氏の自宅の敷地内に、四畳半のプレハブ小屋を建ててもらい、以後亡くなるまでそこに住み、遂に故郷へ帰ることはありませんでした。

横浜市田谷から鎌倉の手広に移ってからは、旺盛な文筆活動が続きます。

昭和48年(1973)59歳の時に、第二歌集『右左口^{うばぐち}』を、昭和55年(1980)66歳の時に、第三歌集『こおろぎ』を刊行しています。

その間、昭和48年(1973)59歳の時に、「短歌」に自伝的エッセイ『青じその花』を発表。昭和

50年(1975)61歳の時には、角川「短歌」第一回愛読者作品部門賞を受賞しました。昭和52年(1977)63歳の時から、「かまくら春秋」に「ほうだい酔想録」の連載を開始しています。翌年には、玉城徹の「うた」創刊に参加し、昭和55年(1980)66歳の時には、筑摩書房「現代短歌全集」第十二巻に『方代』が収録されました。昭和56年(1981)67歳の時には、選歌集『首』を短歌新聞社から刊行し、年末には、かまくら春秋社から随筆集『青じその花』が出版されました。昭和58年(1983)69歳の時には、朝日新聞にエッセイ「天生流露」を4回にわたって執筆しています。

昭和60年(1985)71歳で、肺ガンのために横浜で亡くなりました。死後、同年11月に、遺歌集として、第四歌集『^{かしょう}迦葉』が、不識書院より発行されました。

8. まとめ

山崎方代は、大正3年(1914)生まれですから、世代的には、宮柊二(大正元年[1912]生まれ)や近藤芳美(大正2年[1913]生まれ)といった、戦後を代表する歌人たちとほぼ同世代です。しかし戦後しばらくの間は、歌壇的にも、そして世間的にも、ほとんど無名に等しかったのではないかと思います。ところが近年は、確実に宮柊二や近藤芳美の知名度に肩を並べつつあるのではないのでしょうか。

岡部桂一郎や玉城徹、片山貞美といった、現代を代表する歌人たちと、若い頃からずっと作歌活動をともにして来ましたが、山崎方代の歌は、彼等の歌と比べてもひととき異彩を放っています。

こうした山崎方代の歌や文学的活動を、文学史的にどのように位置づけるべきかという問題については、まだ確立してはいないようです。山崎方代が注目されるようになったのは、ここ20年ぐらいの間のことで、歌人としての評価よりもむしろその独得な風貌や人柄、あるいは野生的な生き方といった、人気の方が先行してきた感があります。

しかし、山崎方代のような個性的な歌人が、歌に求めたものはいったいどのようなものであったのか、今、改めて評価し直されてきているのではないかと思います。

いわばそうした旬の作家を授業で扱うことは、生徒達にとってもきっと有意義な授業になるのではないかと思います、今回の文章を書かせてもらいました。

終わってみると、さんざん悩んだ割には内容もきわめて不十分で、構成も失敗でした。特に、「4. 今回選ばなかった歌について」とありますが、それ以前の問題として、今回なぜ私が先に挙げた歌を採用したのか、その理由を明確にすべきでした。そして、できればそれを、方代の習作時代、第一歌集『方代』～第四歌集『迦葉』の各歌集の時代に分けて、方代の歌風の変遷などを説明していきたくったのですが、こういった一番書かなければならないものの前の段階で、既に与えられた枚数を越えてしまいました。

これらのことに関しては、機会があればいつか書かせていただこうかと思っています。

何か授業のご参考になれば幸いです。

9. 参考文献

(1)山崎方代に関する本

『歌・エッセイ・対談 もしもし山崎方代ですが』 山崎方代著 かまくら春秋社 2004年6月
『迦葉 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 2003年11月

『こんなもんじゃ 山崎方代歌集』 山崎方代著 文芸春秋 2003年 6 月
『百年の恋』 道浦母都子著 小学館 2003年 6 月
『無用の達人 山崎方代』 田澤拓也著 角川書店 2003年 5 月
『山崎方代のうた』 大下一真著 短歌新聞社 2003年 2 月
『方代さん 湯川晃敏写真集』 『方代さん』を創る会 BeeBooks 2001年 5 月
『石の心を 山崎方代という歌人』 高村壽一著 邑書林 2000年 8 月
『骨壺の底にゆられて一歌人山崎方代の生涯』 江宮隆之著 河出書房新社 2000年 2 月
『道化の孤独 歌人山崎方代』 坂出裕子著 不識書院 1998年 8 月
『山崎方代全歌集』 山崎方代著 不識書院 1995年 9 月
『こおろぎ 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 1992年
『右左口 歌集』 山崎方代著 短歌新聞社 1992年
『青じその花 増補改訂版』 山崎方代著 かまくら春秋社 1991年 9 月
『首』 山崎方代著 短歌新聞社 昭和56年
『短歌現代』 短歌新聞社 2003年 5 月号
『山崎方代追悼・研究』 「山崎方代追悼・研究」編集委員会 不識書院 昭和61年
『方代研究』 山崎方代を語り継ぐ会

(2)吉野秀雄に関する本

『鎌倉文学碑めぐり 鎌倉文学館資料シリーズ I』 (鎌倉文学館、昭和63年)
『現代歌集』 筑摩書房 現代日本文学大系94 昭和48年
『やわらかな心 吉野秀雄』 吉野秀雄著 講談社文庫 昭和53年
『吉野秀雄全集第七巻』 吉野秀雄著 筑摩書房 昭和45年
『吉野秀雄全集第八巻』 吉野秀雄著 筑摩書房 昭和45年
『増補改訂版 吉野秀雄全歌集』 吉野秀雄著 短歌研究社 平成14年